「漫才」がヨーロッパを変えた18日間の挑戦

日本で唯一の“フランス語で漫才ができる”国際夫婦漫才コンビが欧州に挑戦した！

漫才コンビ「フランポネ」
マヌー島岡

2025年10月、日本とスイスとの国際夫婦漫才コンビ「フランポネ」が東芝国際交流財団の助成を受け「FRANPONAIS OVER EUROPE TOUR 2025」に挑んだ。欧州の３カ国７都市の12会場で開催した14講座には約340人が参加した。

フランス編（10/10～10/14）

小学校、中学・高校、インターナショナルスクール、日本語学校、大学と、あらゆる教育機関で漫才講座を実施。最も印象的だったのは、参加者の年齢と日本語レベルの幅広さだ。パリ郊外の小中高一貫校では、６歳から18歳までの31人が参加。小学生は身振り手振りと擬音語で、高校生は洗練された言葉選びで挑戦するなど、年齢によって異なる創造性が花開いた。普段は間違いを恐れて日本語を話せない子どもたちが、笑いをつくるために積極的に声を出すようになった。

さらに驚いたのは、日本語学習歴わずか２～３週間の大学生14人が、全員日本語100%で漫才を披露した光景だった。参加者にはフランス人だけでなく、アルジェリア、ガボン、モロッコ出身の学生も含まれていた。文法の完璧さより「伝えたい」気持ちを重視する環境が、言語習得を劇的に加速させた。「Manzaiは日本の心を学ぶ最高の方法」という参加者の言葉が、この活動の本質を物語っている。

パリ同志社クローバー会（2025年10月12日）

ベルギー編（10/15）

ブリュッセル自由大学では、プロジェクトの中では最大規模となる90人の学生が参加した。フランス語を交えながら漫才の基本を解説し、「ボケ」と「ツッコミ」という概念を紹介。学生たちは20分で漫才作成の基礎を学び、その場でオリジナルネタの創作に挑戦した。「C'est le manzai！（これが漫才だ！）」という歓声が響くたび、笑いが国境を越える瞬間を実感した。

この講座で証明されたのは、規模の大きさが笑いの共有を妨げないということだった。むしろ、大人数だからこそ生まれる一体感が、会場に特別な空気をつくり出した。参加者から「漫才は単なる言語学習ではない。相手を理解し、つながるための方法だ」との声も。言語学習という枠を超えた、人と人とのつながりを生む力が漫才にはあることが実証された。

スコットランド編（10/17～10/20）

スコットランドでは、４つの大学で計５回の講座を実施。最も多様性に富んでいたのがエ